徳富蘆花
木下尙江
集
岩野泡鳴

日本文学全集　5

筑摩書房

日本文学全集 5　徳富蘆花　木下尚江　岩野泡鳴　集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　徳富蘆花　木下尚江　岩野泡鳴

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

徳富蘆花集　目次
不如帰　五
木下尚江集　目次
火の柱　一三三
墓場　二三一
岩野泡鳴集　目次
耽溺　三一七
毒薬を飲む女　三七〇
年譜　四五四
人と文学　荒正人　四七五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

德富蘆花集

私がはじめて伊香保に来たのは、明治
[illegible]年の[illegible]月のことで、[illegible]
山荘太郎様と[illegible]新聞を出しはじめ
たころ、主人公の[illegible]花やかな[illegible]
伊香保から出て来た自然[illegible]
香山の[illegible]を踏み、[illegible]
[illegible]年過ぎました。

此三十年の間に関係した[illegible]
[illegible]に限りません。御[illegible]
日清戦争、日露戦争、[illegible]
[illegible]山[illegible]
山[illegible]退[illegible]
[illegible]

不如帰

上篇

（一）の一

上州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色を眺むる婦人。年は十八九。品好き丸髷に結ひて、草色の紐つけし小紋縮緬の被布を着たり。色白の細面、眉の間やゝ蹙りて、頬のあたりの肉寒げなるが、疵と云はば疵なれど、瘠形のすらりと静淑らしき人品。此れや北風に一輪勁きを誇る梅花にあらず、また霞の春に蝴蝶と化けて飛ぶ桜の花にもあらで、夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草、と品定めもしつ可き婦人。

春の日脚の西に傾きて、遠くは日光、足尾、越後境の山々、近くは、小野子、子持、赤城の峰々、入日を浴びて花やかに夕栄すれば、つい下の榎離れて唖々と飛び行く烏の声までも金色に聞ゆる時、雲一片蓬々然と赤城の背より浮び出でたり。三階の婦人は、坐ろに其行方を瞻視りぬ。

両手優かにかき抱きつ可きふつくりと可愛気なる雲は、徐ろに赤城の巓を離れて、遮る物もなき大空を相並むで金の蝶の如く閃きつゝ、優々として足尾の方へ流れしが、やがて日落ちて黄昏寒き風の立つまゝに、二片の雲今は薔薇色に褪ひつゝ、上下に吹き離され、漸次に暮るゝ夕空を別れ別れに辿ると見しも暫時、下なるはいよ〳〵細りて何時しか影も残らず消ゆれば、残れる一片は更に灰色に褪ひて朦乎と空にさまよひしが、果ては山も空も唯一色に暮れて、三階に立つ婦人の顔のみぞ夕闇に白かりける。

（一）の二

「御嬢――おや如何致しませう、また口が滑つて、おほゝゝゝ。あの、奥様、唯今帰りましてムいます。おや、真闇。奥様エ、何処に御出遊ばすのでムいます？」

「ほゝゝゝ、此処に居るよ」

「おや、ま、其処に。早く御入り遊ばせ。御風邪を召しますよ。旦那様はまだ御帰り遊ばしませんでムいますか？」

「如何遊ばしたんだらうね？」と障子を開けて内に入りながら「何なら帳場へ其様言つて、御迎人をね」

「左様でムいますよ」言ひつゝ手さぐりに燐寸を擦りてランプを点くるは、五十あまりの老女。

折から階段の音して、宿の女中は上り来つ。

「おや、恐れ入ります。旦那様は大層御緩りでいらつしや

います。……はい、あの先刻若い者を御迎へに差上げましてムいます。もう御帰りでムいませう。――御手紙が――」

「おや、お父上の御手紙――早く御帰りなされば宜に！」と丸髷の婦人はさも懐かし気に表書を打かへし見る。

「あの、殿様の御状で――。早く伺ひたいものでムいますね。おほゝゝゝ、屹度また面白いことを仰有つてでムいませう」

女中は戸を立て、火鉢の炭をついで去れば、老女は風呂敷包を戸棚に仕舞ひ、立つて此方に来り、

「本当に冷えますこと！　東京とは余程違ひますでムいますねェ」

「五月に桜が咲いて居る位だからねェ。姥や、もつと此方へお寄りな」

「有り難う存じます」云ひつゝ老女はつく〳〵顔打眺め

「嘘の様でムいますねェ。斯様に御丸髷に御結ひ遊ばして、整然と坐つて御出遊ばすのを見ますと、ばあやが御育て申上げた御方様とは思へませんでムいますよ。先奥様が御亡なり遊ばした時、ばあやに負されて、母様母様ツて御泣き遊ばしたのは、昨日の様でムいますがねェ」はら〳〵と落涙し「御輿入の時も、ばあやはねエあなた、彼御立派な御容子を先奥様が御覧遊ばしたら、如何様に御嬉しかつたらうと思ひましてねエ」と襦袢の袖引出して眼を拭ふ。

此方も引入れらるゝ様に俯きつ、火鉢に翳せし左手の指環のみ燦然と照り渡る。

やゝありて姥は面を上げつ。「御免遊ばせ、また此様な事を。おほゝゝ年が寄ると愚癡っぽくなりましてねェ。おほゝゝゝ、御嬢――奥様も此までは色々御苦労も遊ばしましたねェ。本当によく御辛抱遊ばしましたよ。最早最早此れからは御目出度事ばかりでムいますよ、旦那様は彼通り御やさしい御方様――」

「御帰り遊ばしましてムいます」

と女中の声階段の口に響きぬ。

（一）の三

「やあ、草臥れた、草臥れた」

足袋草鞋脱ぎ棄てて、出迎ふ二人に一寸会釈しながら、廊下に上りて来し二十三四の洋服の男、提燈持ちし若い者を見返りて、

「いや、御苦労、御苦労。其花は、面倒だが、湯に浸けて置いて貰はうか」

「まあ、奇麗！」

「本当にま、奇麗な躑躅でムいますこと！　旦那様、何処で御採り遊ばしました？」

「奇麗だらう。そら、黄色いやつもある。葉が石楠に似るだらう。明朝浪さんに活て貰はうと思つて、折つて来たんだ。……どれ、すぐ湯に入つて来ようか」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「本当に旦那様は御活潑でいらつしやいますこと！　如何しても軍人の御方様は御違ひ遊ばしますねエ、奥様」

奥様は丁寧に畳みし外套を窃と接吻して衣桁にかけつゝ、たゞ含笑みて無言なり。

階段も轟と上る足音障子の外に絶えて、「あゝ好心地！」と入り来る先刻の壮夫。

「おや、旦那様最早御上り遊ばして？」

「男だもの。あはゝゝゝ」と快よく笑ひながら、妻がきまり悪げに被る大縞の褞袍引かけて、「失敬」と座蒲団の上に胡坐をかき、両手に頬を撫でぬ。栗虫の様に肥えし五分刈頭の、日にやけし顔は宛ながら熟せる桃の如く、眉濃く眼いきゝと、鼻下に薄すり毛虫程の髭は見えながら、まだ何処やらに幼な顔の残りて、含笑まる可き男なり。

「良人、御手紙が」

「あ、乃舅だな」

壮夫は一寸坐様を直して、封を切り、中を出せば落つる別封。

「此は浪さんのだ――ふむ、御変りもないと見える……はゝゝゝ滑稽を仰有るな……御話を聞く様だ」笑を含むで読み終へし手紙を巻いて側に置く。

「卿にもよろしく。場所が変るから、持病の起らぬやうに用心おしつて仰有つてよ」と「浪さん」は饌を運べる老女を顧みつ。

「まあ、左様でムいますか、有り難う存じます」

「さあ、飯だ、飯だ、今日は握飯二個で終日歩行づめだつたから、腹が減つたこつたら夥しい。……はゝゝ。此あ何ちう魚だな、鮎でもなしと……」

「山女とか申しましたつけ――ねエ姥や」

「左様？　甘い、中々甘い、其れお代りだ」

「ほゝゝ、旦那様の御早うムいますこと」

「其筈さ。今日は榛名から相馬が嶽に上つて、それから二ツ嶽に上つて、屏風岩の下まで来ると迎への者に会つたんだ」

「其様に御歩行き遊ばしたの？」

「併し相馬が嶽の眺望は好かつたよ。浪さんに見せたい位だ。一方は茫々たる平原さ、利根が遙かに流れてね。一方は所謂山又山さ、其上から富士がちよつぽり覗いてるなんぞは頗る妙だ。歌でも詠めたら、一とつ人麿と腕比べをしてやる処だつた。あはゝゝゝ。そら今一とつお代りだ」

「其様に景色が宜うムいますの。行つて見たうムいましたこと！」

「ふゝゝゝ。浪さんが上れたら、金鵄勲章をあげるよ。其あ急峻い山だ、鉄鎖が十本も下つてるのを、つたつて上るのだからね。僕なんざ江田島で鍛い上げた体で、今でもすはと云ふと檣でも綱でもぶら下る男だから、何でもないがね、浪さんなんざ東京の土踏んだ事もあるまい」

「まあ、彼様な事を」嫣然顔を赧らめ「此れでも学校では体操も致しましたし――」

「ふゝゝゝ。華族女学校の体操ぢや仕方がない。そう〳〵、何時だつけ、参観に行つたら、琴だか何だかコロン〳〵鳴つて、一方で『地球の上に国と云ふ国は』何とか歌ふと、女生が扇を持つて起つたり踞むだりぐるり廻つたりしとるから、踊の温習かと思つたら、彼が体操さ！　あはゝゝゝ」

「まあ。御口がお悪い！」

「そう〳〵。彼時山木の女と並むで、垂髪に結つて、ありあ何とか云つたつけ、葡萄色の袴はいて澄まして躍つてたのは、たしか浪さんだつけ」

「ほゝゝゝ。彼様な言を！　あの山木さんを御存じでいらつしやいますの？」

「山木はね、内の亡父が世話したんで、今に出入しとるのさ。はゝゝゝ、浪さんが敗北したもんだから黙つてしまつたね」

「彼様な言！」

「おほゝゝゝ。其様に御夫婦喧嘩を遊ばしちやいけません。さ、さ、御仲直りの御茶で御座いますよ。ほゝゝゝ」

（二）

前回仮に壮夫と云へるは、海軍少尉男爵川島武男と呼ばれ、此回良媒ありて陸軍中将子爵片岡毅とて名は海内に震へる将軍の長女浪子と目出度合巹の式を挙げしは、つい先月の事にて、こゝ暫時の暇を得たれば、新婦と其実家よりつけられし老女の幾を連れて四五日前伊香保に来りしなり。浪子は八歳の年実母に別れぬ。八歳の昔なれば、母の姿貌は歴々と覚えねど、始終笑を含みて居られしことと、臨終の其前に吾を臥床に呼びて、痩せ細りし手に吾が小さき掌を握りしめ「浪や、阿母は遠い所に行くからね、成人しくして、阿爺を大事にして、駒ちやんを可愛がつて遺らなければなりませんよ。今五六年……」と云ひさしてはら〳〵と涙を流し「阿母が在なくなつても阿母を記憶えて居るかい」と今は肩過ぎし吾黒髪の其頃はまだ総さりと額際まで剪り下げしをかい撫で〳〵し玉ひし事も記憶の底深く彫りて思ひ出ぬ日はあらざりき。

一年程過ぎて、今の母は来つ。其れより後は何も彼も変り果てたることになりぬ。先の母は歴としたる士の家より来しなれば、万づ折目正しき風なりしが、其れにても彼の様に仲好き御夫婦は珍らしと婢の言へるを聴けることもありし。今の母は矢張歴とした士の家から来りしなれど、早くより英国に留学して、男まさりの上に西洋風の染みしなれば、何事も先とは打て変りて、すべて先の母の名残と覚ゆるをば宛ながら打消す様に片端より改めぬ。父に対しても事毎に遠慮もなく語らひ論ずるを、父は笑ひて聞き流し「好々、乃公が負ぢや、負ぢや」と言はるゝが常なれど、或時極気に入りの副官、難波と云へるを相手の晩酌に、母

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も来りて座に居しが、父はぢろりと母を見てから〳〵と笑ひながら「喃難波君、学問の出来る細君は持つもんぢやごわはん、いや散々な目に遭はされますぞ、あはゝゝゝ」と云はれしとか。流石の難波も母の手前、何と挨拶もし兼ねて手持無沙汰に盃を上げ下げして居しが、其後己が細君に呉々も女児共には書物を読み過ごさせな、高等小学卒業で沢山と云ひ含められしとか。

浪子は幼きより至て人なつこく、しかも怜悧に、香炉峯の雪に簾を捲く程ならずとも、三つの頃より姥に抱かれて見送る玄関に吾れから帽をとつて阿爺の頭に載す程の気は利きたり。伸びむ伸びむとする幼な心は、譬へば春の若菜の如し。仮令一度雪に降れしとて、蹂躪だにせられずば、自づから雪融けて青々とのぶるなり。慈母に別れし浪子の哀は子供には似ず深かりしも、後の日だに照りたらば苦もなく育つ筈なりき。束髪に結ひて、側へ寄れば香水の香の立ち迷ふ、眼少し釣りて口大きなる今の母を初めて見し時は、流石に少したじろぎつるも、人なつこき浪子は此母君にだに慕ひ寄る可かりしに、継母は吾れから挟む一念に可愛ゆき児をば押隔てつ。世馴れぬ吾儘者の、学問の誇り、邪推、嫉妬さへ手伝ひて、まだ八つ九つの可愛児を心ある大人なんどの様に相手にするより、此方は取つく島もなく、寒さ淋しさは心に浸みぬ。あゝ愛されぬは不幸なり、愛することの出来ぬは猶更に不幸なり。浪子は母あれども愛するを得ず、妹あれども愛するを得ず、唯父と姥の幾と実母の姉なる伯母はあれど、何を云ひても伯母は余所の人、幾は召使の身、其れすら母の眼常に注ぎてあれば、少しよくしても、して貰ひても、互に贔負の引倒し、却て為にならず。唯父こそは、父こそは渾身愛に満ちたれど、其父中将すらも流石に母の前をばかねらるゝ、其も思へば慈愛の一つなり。されば母の前では余儀なく叱りて、蔭へ廻れば言葉少なく情深くいたはる父の人知らぬ苦心、怜悧き浪子は十分に酌んで、あゝ嬉しい忝じけない、何卒身を粉にしても父上の御為にと心に思は溢るれど、気がつく程にすれば、母は自身の領分に踏み込まれたる様に気を悪くするが辛く、光を韞みて言寡に気もつかぬ体に控へ目にして居れば、却て意地悪のやれ鈍物のと思はれ言はるゝも情無し。或時は聊かの間違より、流るゝ如き長州弁に英国仕込の論理法もて滔々と言ひ捲られ、己のみかは亡き母の上までもおぼろ気ならず中傷られて、流石に口惜しく嚙むだ唇開かんとしては縁側にちらりと父の影見ゆるに口を噤み、或はまたあまり無理なる邪推されては「母さまもあんまりな」と窓帷の陰に泣いたることもありき。父ありと云ふや。父はあり。愛する父はあり。然りながら家が世界の女の児には、五人の父より一人の母なり。其母が、其母が此通りでは、十年の間には癖もつく可く、艶も失すべし。「本当に彼女は些もさつぱりした所がない、いやに執念な人だよ」と夫人は常に罵りぬ。あゝ土鉢に植ゑても、高麗交趾の鉢に植ゑても、花は花なり、何れか日の光を待たざるべき。浪子

は実に日蔭の花なりけり。

されば此たび川島家と縁談整ひて、輿入済みし時は、浪子も息をつき、父中将も、継母も、伯母も、幾も、皆それぞれに息をつきぬ。

「奥様（浪子の継母）は御自分は華手が御好きな癖に、御嬢様には嫌な、じみなものばかり、買つて御あげなさる」と毎に唸やきし姥の幾が、嫁入仕度の薄きを気にして、先奥様が御出になつたらとかき口説いて泣きたりしも、浪子は匆々として吾家の門を出でぬ。今迄知らぬ自由と楽しさの此さきに待つとし思へば、父に別るゝ哀さも聊か慰めらるゝ心地して、匆々として行きたるなり。

（三）の一

伊香保より水沢の観音まで一里あまりの間は、一条の道、蛇の如く禿山の中腹に沿うてうねり、唯二ケ所ばかり山の裂目の谷をなせるに陥りてまた這ひ上れる外は、眼をねむりても行かる可き道なり。下は赤城より上毛の平原を見晴らしつ。此処等あたりは一面の草原なれば、春の頃は野焼の痕の黒める土より、さま〳〵の草萱萩桔梗女郎花の若芽など、生え出でて毛氈を敷けるが如く、美しき草花其間に咲き乱れ、綿帽子着た銭巻、ひよろりとした蕨、此処も其処もたちて、一たび此処に下り立たば春の日の永きも忘る可き所なり。

武男夫婦は、今日の晴を蕨狩すとて、姥の幾と宿の女中を一人伴れて、午食後より此処に来つ。早や一としきり採りあるきて、少し草臥が来しと見え、女中に持たせし毛布を草の軟らかなる処に敷かせて、武男は靴ばきのまゝごろりと横になり、浪子は、麻裏草履を脱ぎ桃紅色の手巾にて二つ三つ膝のあたりを掃ひながらふわりと坐りて、

「おゝ軟か！　勿体ない様でムいますね」

「ほゝゝお嬢――あらまた、御免遊ばせ、お奥様の好い御顔色に御なり遊ばしましたこと！　そして彼様に御唱歌なんぞ御歌ひ遊ばしましたのは、本当にお久し振りでムいますねエ」と幾は嬉し気に浪子の横顔を覗く。

「余り歌つて何だか渇いて来たよ」

「御茶を持つて参りませんで」と女中は風呂敷解きて夏蜜柑、袋入りの乾菓子、折詰の巻鮓など取り出す。

「何、此があれば茶は入らんさ」と武男は衣兜よりナイフ取り出して蜜柑を剝きながら「如何だい浪さん、僕の手際には驚いたらう」

「彼様な言を仰有るわ」

「旦那様の御採り遊ばしたのには、杪欏が沢山雑つて居ましてムいますよ」と、女中が口を出す。

「馬鹿を言ふな。負惜をするね。はゝゝ。今日は実に愉快だ。好天気ぢやないか」

「奇麗な空ですこと、碧々して、本当に小袖にしたい様でムいますね」

「水兵の服には猶宜からう」

「おゝ好い香！　草花の香でせうか、あ、雲雀が鳴いてますよ」
「さあ、御鮓を戴いて御腹が出来たから、今一拝して来ませうか、ねエ女中さん」と姥の幾は宿の女を促し立てて、また蕨採りにかゝりぬ。
「些し残しといて呉れんとならんぞ――健な姥ぢやないか、ねエ浪さん」
「本当に健でムいますよ」
「浪さん、草臥はしないか」
「否、些も今日は疲れませんの、わたくし此様に楽しいことは始めて！」
「遠洋航海なぞすると随分好い景色を見るが、併し此様な高い山の見晴はまた別だね。実に爽々するよ。そら其処の左の方に白い壁が閃々するだらう。あれが来時に浪さんと昼飯を食つた渋川さ。それから今少此方の碧いリボンの様なものが利根川さ。彼が坂東太郎た見えないだらう。それからあの、赤城の、斯うずうと夷とる、それ〳〵煙が見えとるだらう、あの下の方に何だかうぢやうぢやしてるね、彼が前橋さ。何？　ずつと向ふの銀の針の様なの？　そうそう、彼は矢張利根の流だ。あゝもう先きは霞むで見えない。両眼鏡を持つて来る処だつたねエ、浪さん。併し霞がかけて、先が明瞭しないのも却て面白いかも知れん」
浪子は窃と武男の膝に手を投げて溜息つき
「何時までも斯して居たうムいますこと！」

黄色の蝶二つ浪子の袖を掠めてひら〳〵と飛び行きしあとより、さわ〳〵と草踏む音して、帽子被りし影法師突然に夫婦の眼前に落ち来りぬ。
「武男君」
「やあ！　千々岩君か。如何して此処に？」

（三）の二

新来の客は二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍らしき色白の好男子。惜しきことには、口のあたり何処となく鬱し気なる処ありて、黒水晶の如き眼の光鋭く、見つめらるゝ人に不快の感を起さすが、疵なるべし。此は武男が従兄に当る千々岩安彦とて、当時参謀本部の下僚に居れど、腕利の聞えある男なり。
「突然で、喫驚だらう。実は昨日用があつて高崎に泊まつて、今朝渋川まで来たんだが、伊香保は一と足と聞いたから、一寸遊びに来たのさ。それから宿に行つたら、君達は蕨採の御遊と聞いたから、路を教はつて遣つて来たんだ。なに、明日は帰らなけりやならん。邪魔に来た様だな。はツはツ」
「馬鹿な。――君其後宅に行つて呉れたかね」
「昨朝一寸寄つて来た。叔母様も元気で居なさる。が、最早君達が帰りさうなものだつて連りと唸して居なすツたツけ。――赤坂の方でも御変りもありませんです」と例の黒水晶の眼は烱乎と浪子の顔に注ぐ。

先刻から赧らめし顔は一入紅うなりて浪子は下向きぬ。

「さあ、援兵が来たから最早負けないぞ。陸海軍一致したら、娘子軍百万ありと雖も恐るゝに足ずだ。――なにさ、先刻から此御婦人方が吾輩一人を窘めて、やれ蕨の採り方が少いの、採たのが蕨ぢやないだの、悪口して困つたンだ」と武男は顎もて今来し姥と女中を指す。

「おや、千々岩様――如何して来ツしやいまして？」と姥は喫驚した様子にて少し小鼻に皺を寄せつ。

「乃公が先刻電報かけて加勢に呼むだンだ」

「おほゝゝ、彼様な言を仰有るよ――あゝ左様で、へえ、明日は御帰り遊ばすンで。へえ、帰ると申しますと、ね、奥様、御夕飯の仕度もムいますから、妾共は御先に帰りますでムいますよ」

「呸、其が宜い、其が宜い。千々岩君ゐ来たから、沢山御馳走するンだ。其積りで腹を減して来るぞ。はゝゝゝ。なに、浪さんも帰る？　まあ居るが宜ぢやないか。味方が無くなるから逃げるンだな。大丈夫さ、決して窘めはしないよ。あはゝゝゝ」

引とめられて浪子は居残れば、幾は女中と荷物になる可き毛布蕨など収拾めて帰り行きぬ。

あとに三人は一しきり蕨を採りて、それよりまだ日も高ければとて水沢の観音に詣で、先刻蕨を採りし所迄帰りて暫く休み、徐々帰途に上りぬ。

夕日は物聞山の肩より花やかに射して、道の左右の草原は萌黄の色燃えんとするに、其処此処に立つ孤松の影長々と横はりつ。眼をあぐれば、遠き山々静かに夕日を浴び、麓の方は夕煙諸処に立ち上る。遙か向ふを行く草負牛の、叱られて哞と鳴く声空に満ちぬ。

武男は千々岩と並びて話しながら行くあとより浪子は従ひて行く。三人は徐かに歩みて、今しも壑を渉り終り、坂を上りて眩ゆき夕日の道に出でつ。

武男は忽然足をとゞめぬ。

「やあ、失策つた。ステッキを忘れた。なに、先刻休むだ処だ。待つてて呉れ玉へ、一ト走り取つて来るから――なに、浪さんは待つてれば宜ぢやないか。直ぐ其処だ。全速力で駈けて来る」と武男は強て浪子を押とめ、手巾包の蕨を草の上にさし置き、急ぎ足に坂を下りて見えずなりぬ。

（三）の三

武男が去りし後に、浪子は千々岩と一間ばかり離れて無言に立ちたり。頓て谷を渉りて彼方の坂を上り果てし武男の姿小さく見えたりしが、また忽ち彼方に向ひて消えぬ。

「浪子さん」

彼方を望み居し浪子は、耳元近き声に呼びかけられて思はず身を震はしたり。

「浪子さん」

一歩近寄りぬ。

浪子は二三歩引下りて、余儀なく顔をあげたりしが、例の

黒水晶の目にひたと熟視められて、側向きたり。
「御目出度」
此方は無言、耳までさつと紅になりぬ。
「御目出度う。イヤ、御目出度う。併し目出度ない奴も何処かに居るですがね。へゝゝゝ」
浪子は俯きて、杖にしたる海老色の洋傘の尖もてしきりに草の根を抉りつ。
「浪子さん」
蛇に蜚縁らるゝ栗鼠の今は是非なく顔を上げたり。
「何でムいます？」
「男爵に金、は矢張好いものですよ。へゝゝゝゝ、いや御目出度う」
「何を仰有るのです？」
「へゝゝゝゝ、華族で、金があれば、馬鹿でも嫁に行く、金がなけりや如何様なに嘉つても唾もひツかけん、ね、此れが当今の姫御前です。へゝゝゝ、浪子さんなンざ其様な事はないですがね」浪子も流石に血相変へて吃と千々岩を睨みたり。
「何を仰有るンです。失敬な。今一度武男の目前で言つて御覧なさい。失敬な。男らしく父に相談もせずに、無礼千万な艶書を吾に遣つたりなンぞ……最早此から決して容赦はしませぬ」
「何ですと？」千々岩の額は真暗くなり来り、唇を嚙むで、一歩二歩寄らむとす。
突然に嘶く声足下に起りて、馬上の半身坂より上に見え来りぬ。
「ハイ〳〵〳〵ッ。御邪魔でがあすよ。ハイ〳〵〳〵ッ」
と馬上なる六十あまりの老爺、頬被りをとりながら、怪しげに二人の容子を見かへり〳〵行き過ぎたり。
千々岩は立ちたるまゝに、動かず。額の条はやゝ舒びて、結びたる唇の辺りに冷笑のみぞ浮びたる。
「へゝゝゝ、御迷惑なら御返へしなさい」
「何をですか？」
「何が何をですか、御嫌ひなものを！」
「ありません」
「なぜないのです」
「汚らはしいものは焼き棄ててしまひました」
「いよ〳〵ですな。別に見た者は吃度ないですか」
「ありません」
「いよ〳〵ですか」
「失敬な」
浪子は忿然として放ちたる眼光の、彼が真黒き眼の凄じきに見返へされて、不快に得堪ず慄然と震ひつゝ、遙かに眼を翳しぬ。恰も其時谷を隔てし彼方の坂の口に武男の姿見え来りぬ。顔一点霜の如く赭く夕日に閃めきつ。
浪子はほつと息つきたり。
「浪子さん」
千々岩は懲りずまに彼方此方逸らす浪子の眼を追ひつゝ

「浪子さん、一言云つて置くが、秘密、何事も秘密に、な、武男君にも、御両親にも。で、なけりゃ——後悔しますぞ」

雷の如き眼光を浪子の面に射つゝ、千々岩は身を転じて、俛して其処らの草花を摘み集めぬ。靴音高く、ステッキ打振りつゝ坂を上り来し武男「失敬、失敬。あ苦しい、走りづめだツたから。併しあつたよ、ステッキは。——う、浪さん如何かしたかい、ひどく顔色が悪いぞ」

千々岩は今摘みし菫の花を胸の飾紐に挿しながら、

「なに、浪子さんはね、君が余り隙取つたもンだから、大方迷子になつたンだらうツて、ひどく心配しなすツたンさ。はツはゝゝゝ」

「あはゝゝゝ。其様か。さあ、徐々帰らうぢやないか」

三人の影法師は相並むで道辺の草に曳きつゝ伊香保の方に行きぬ。

（四）の一

午後三時高崎発上り列車の中等室の一隅に、人無きを幸ひ、靴ばきのまゝ腰掛の上に足さしのばして、巻莨を吹しつゝ、新聞を読み居るは千々岩安彦なり。

手荒らく新聞を投げやり、

「馬鹿！」

歯の間より言ふ拍子に落ちし巻莨を腹立し気に踏消し、窓の外に唾きしまゝ暫らく彳みて居たるが、頓て舌打鳴らして、室の全長を二三度往来して、また腰掛に戻りつ。手を拱ぬきて、眼を閉ぢぬ。

真黒き眉は一文字にぞ寄りたる。

* * * * *

千々岩安彦は孤なりき。父は鹿児島の藩士にて、維新の戦争に討死し、母は安彦が六歳の夏其頃霍乱と云ひける虎列刺に斃れ、六歳の孤児は叔母——父の妹の手に引取られぬ。父の妹は即ち川島武男の母なりき。

叔母は流石に少しは安彦を憐みたれども、叔父はこれを厄介者に思ひぬ。武男が仙台平の袴穿きて儀式の座につく時、小倉袴の萎えたるを着て下座にすくまされし千々岩は、身は武男の如く親、財産、地位などのあり余る者ならずして、全く吾拳と吾智慧に世を渡る可き者なるを早く悟り得て、武男を悪くみ、叔父を怨めり。

彼は世渡の道に裏と表の二条あるを見ぬきて、如何なる場合にも捷径をとりて進まんことを誓ひぬ。されば叔父の蔭によりて陸軍士官学校にありける間も、同窓の者は試験の、点数のと鬩ぐ間に、千々岩は郷党の先輩にも出入油断なく、苟くも交るに身の便宜になる可き者を選み、他の者共が卒業証書握りて吻と息つく間に、早くも手蔓つたうて陸軍の主脳なる参謀本部の囲ひ内に乗り込み、他の同窓生は彼方此方の中隊附となりてそれ練兵やれ行軍と追ひつかはるゝに引かへて、千々岩は参謀本部の階下に煙吹かして戯談

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com